女性の生活設計に関する研究—Ⅰ

性・年齢に伴う生活意識の動向

河野 光子・品川 汐夫

1．緒　言

社会情勢が激動する今日，日本の女性の社会的役割は，「多様な選択」の時代という意識がめばえ，年と共にその重要性が増し，その変化においてもめざましいものがある．そこで国際婦人年（1975年）以来の運動と共に，女性のライフスタイルに関する国内調査も，国から地方や企業におよんで年々，数多く実施されている．これらの結果は，新しい女性像を考える多くの資料として提供されている[1~3]．

地方中都市の一つのサンプルとして，東京より西に遠く離れ，北九州・福岡，二大政令都市の影響を受け易く，その経済的繁栄の峠を越えた下関市を取り上げた．下関市に関係のある社会人および学生数約3000人に対して，その生活意識に関するアンケートを求め，諸因子間との関係を統計処理した結果を報告する．

2．調査および統計処理方法

2・1　調査項目

アンケートは1）回答者の分類項目　2）生活設計に関する設問項目に分け，選択または記述方式によった．

第1項目：(1)性別(2)年齢(3)配偶者の有無(4)学生の専攻区別と在学年次(5)社会人の職業(6)住所（下関市，北九州市，豊浦郡，その他）

第2項目：生活の価値観，労働目的，女性のライフコース，男女の役割分担，家事労働，結婚・出産・高齢者介護についての設問群．

2・2　調査対象

下関市内居住者が主対象で，市内へ通勤・通学の社会人・学生および園児・生徒達の保護者を含めた．なお，学生は就職や生活の将来設計に関心の強い高学年生を主とした．

アンケートを依頼した学生集団は，東亜大学，水産大学校，下関市立大学，梅光女学院大学並びに同短期大学部，下関女子短期大学である．社会人は市内の幼稚園・中学校・高等学校の保護者，病院・銀行・郵便局の勤務者を対象とした．

調査は自記留置法により実施し，アンケート用紙4250枚を配布，その回収率は69.5％であった．調査期間は平成４年２月11日～同６月30日．

2・3　回答者の構成

社会人回答者（職業名記入者）の年齢別，職業別および婚姻歴別の構成比は男女別に分けて表１―１に示した．即ち，男性503名，女性742名計1245名である．職業別にみると男性では公

表１－１　社会人回答者の構成（単位：人）

(1)　年齢別構成

年　齢	男	女	計
無回答	0	3	3
20未満	2	39	41
20～24	23	129	52
25～29	27	74	101
30～39	94	173	267
40～49	302	295	597
50～59	54	26	80
60以上	1	3	4
合　計	503	742	1,245

(2)　職業別構成

職　業	男	女	計
農林・水産業	18	18	36
鉱・工業	11	2	13
土建業	47	5	52
製造業	87	59	146
教員	4	7	11
卸・小売	47	34	81
金融・保険	62	141	203
サービス業	64	307	371
電気・ガス	8	3	11
公務員	119	23	142
運輸	10	2	12
無職	1	114	115
その他	25	27	52

(3)　婚姻歴別構成

配偶者	男	女	計
無回答	1	2	3
未婚	54	249	303
既婚	435	430	865
離別	13	61	74

務員が最も多くその構成比は23.7，次いで製造業17.3，サービス業12.7，金融・保険12.3，卸・小売業および土建業は9.3％である．女性ではサービス業が圧倒的に多く41.4，次いで金融・保険19.0，無職15.4％である．

学生回答者（専攻学部名記入者）の学年次別，専攻別の構成比は，男女に分けて表１―２に示した．即ち，男性502名，女性866名計1368名．専攻別の構成比は，男性では商経系59.6，水

産系25.0，理工系15.1％の順である．また，女性では文学系59.9，家政系12.4，保育系11.2，芸術系8.1，商経系6.2％である．学年次別構成比は，男性では３年次生60.4，４年次生23.3，２年次生15.7％である．また女性では２年次生52.8，１年次生25.1，３年次生20.7，４年次生1.2％である．

表１－２　学生回答者の構成（単位：人）

(1) 学年次別構成

学　年	男	女	計
1　年	1	218	219
2　年	79	458	537
3　年	305	180	385
4　年	117	10	127
合　計	502	866	1,368

(2) 専門別構成

学　部	男	女	計
理工系	76	7	83
商経系	300	54	354
水産系	126	10	136
文学系	0	520	520
家政系	0	108	108
保育系	0	97	97
芸術系	0	70	70

2·4　統計処理方法

社会人は性別，年齢別（７区分）および回答カテゴリー別に，学生は性別，年次別，および回答カテゴリー別に３次元の分割表として集計した．

また，社会人のデータ（1245名分）を用いて，カテゴリーのクラスター解析[4]を行ない，その回答パターンを３つの群（A，B，D）に分けて検討した．また，社会人データはさらに３次元クロス集計表を双対尺度法[5]により解析した．

3．結果と考察

3·1　ライフスタイルに関する意識調査結果

3·1·1　「生きていく上で大切と思われる」ことについて

3·1·1·1　社会人の場合：１番大切と思われることは，男女共に「健康」が圧倒的に多く，その割合は高年齢になるほど大きくなる傾向が見られる．また，女性のほうが男性よりも健康を重視している．男女とも「家庭生活」，「友人関係」，「収入」を最も大切と見る人がそれぞれ少数いるが，「職業」は男性のみ，「結婚」は女性のみの選択であった．

２番目，３番目に大切と考えることは，男女共に「家庭生活」や「収入」をあげるものが多く，この傾向は高年齢になるほど多くなる．逆に「結婚」や「友人関係」は若年齢ほどその割

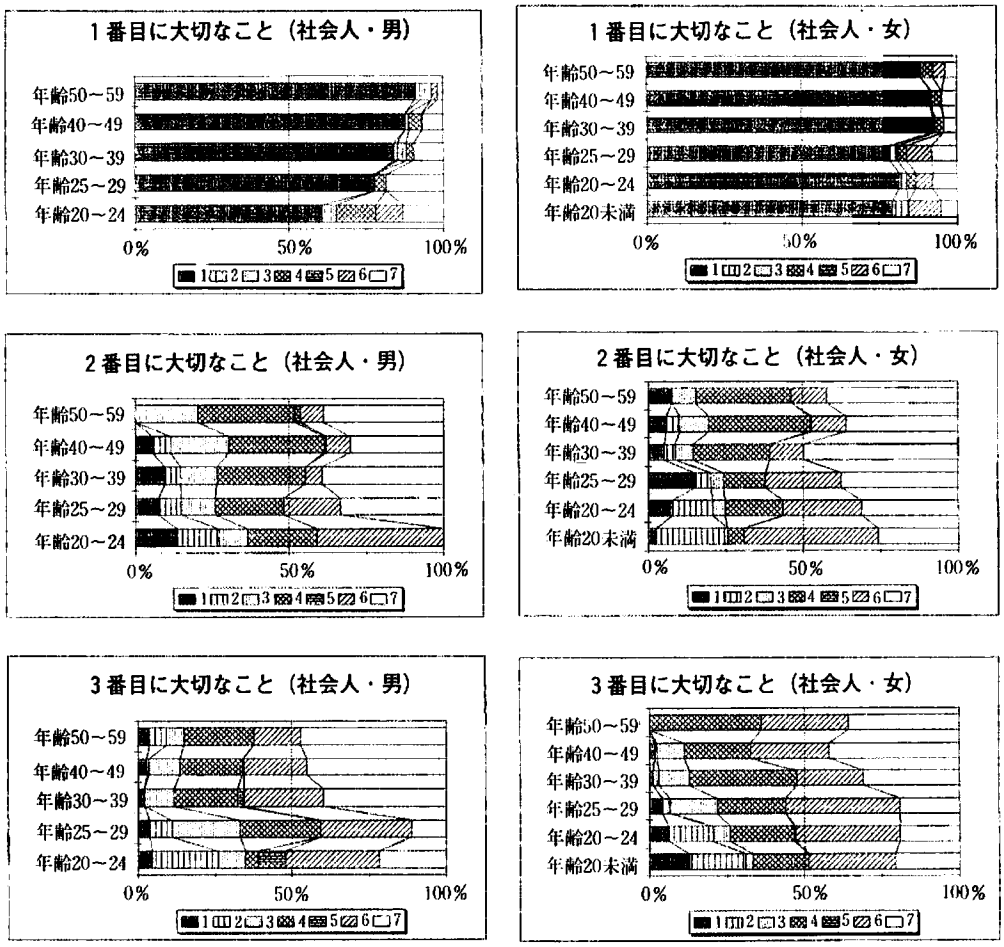


図1－1 「生きていく上で大切と思われる」こと―社会人―

1：健康　2：結婚　3：職業　4：収入
5：地位・名声　6：友人関係　7：家庭生活

合が大きい．「職業」を2，3番目に大切と考える人は25歳以上で増加し，「結婚」は逆に減少する傾向があり，この両者は25歳で意識の変化が見られる．また，「職業」に対する関心度は女性の方が低い．

3·1·1·2 学生の場合：一番大切と思うことは，男女共に，「健康」が圧倒的に多く，次いで「友人関係」，「家庭生活」である．このことは，同じ年齢層の社会人の場合と同じであり，この年代の共通価値観と見られる．社会人の場合との相違は，男性では「結婚」，「地位・名声」が入り，「収入」の割合が減少し，女性では「職業」が僅かながら挙げられていることである．

2・3番目に大切と考えることは，男女共「友人関係」，「家庭生活」，「収入」を挙げるもの

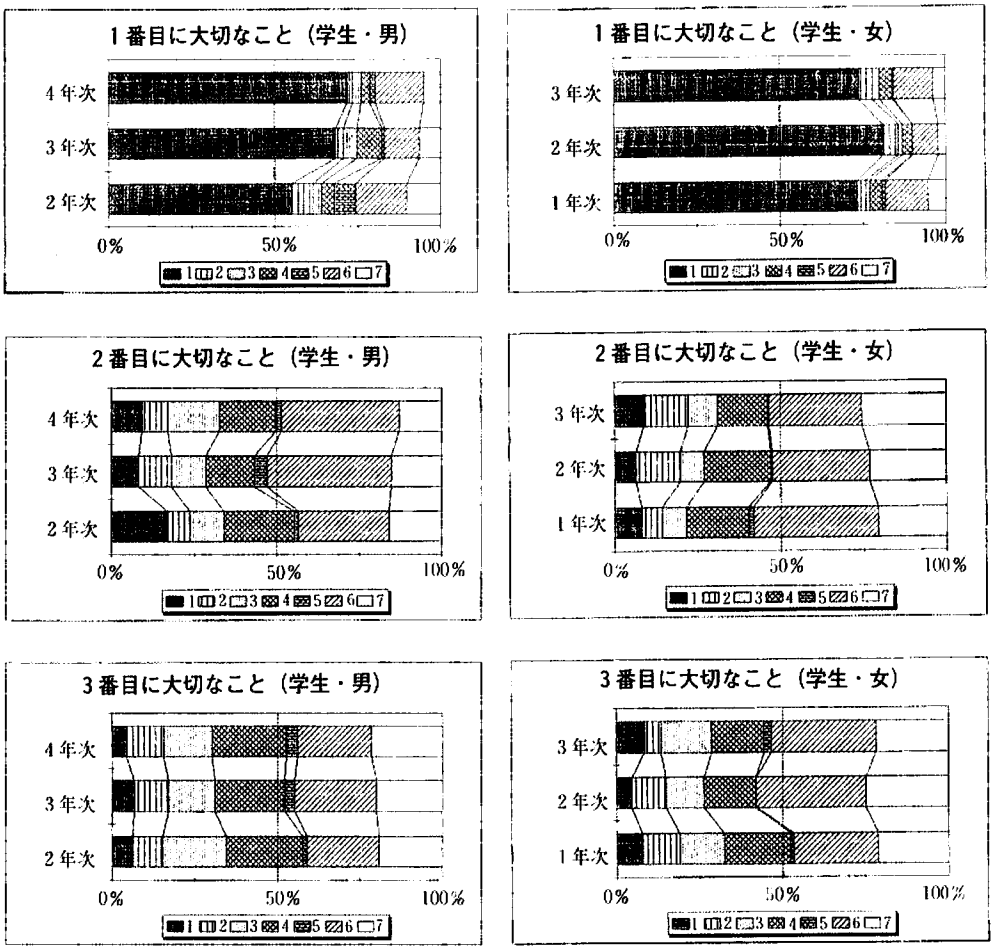


図1－2 「生きていく上で大切と思われる」こと―学生―

1：健康　2：結婚　3：職業　4：収入
5：地位・名声　6：友人関係　7：家庭生活

が多い．これも同年齢の社会人の場合と同じであるが，違う点は，男性では「結婚」の割合が少なく，女性では「職業」を選択する割合が高い点である．

学年による相違点は，男子学生が「健康」を一番大切と考える割合が高学年ほど高くなっていることである．

3·1·2 「働く目的として考えられる」ことについて

3·1·2·1 社会人の場合：1番目の目的としては，男女共に「経済的安定」の割合が最も高く，特に男性30歳以上でこの割合が高い．次いで男女共に「自分の資格・技能が生かせる」の割合が大きく，特に女性の25～39歳の選択が大きいのが興味がある．その他，男性では「社会に役立つ」が，女性では「自分の視野を広げ社会勉強になる」が，それぞれ高い割合で

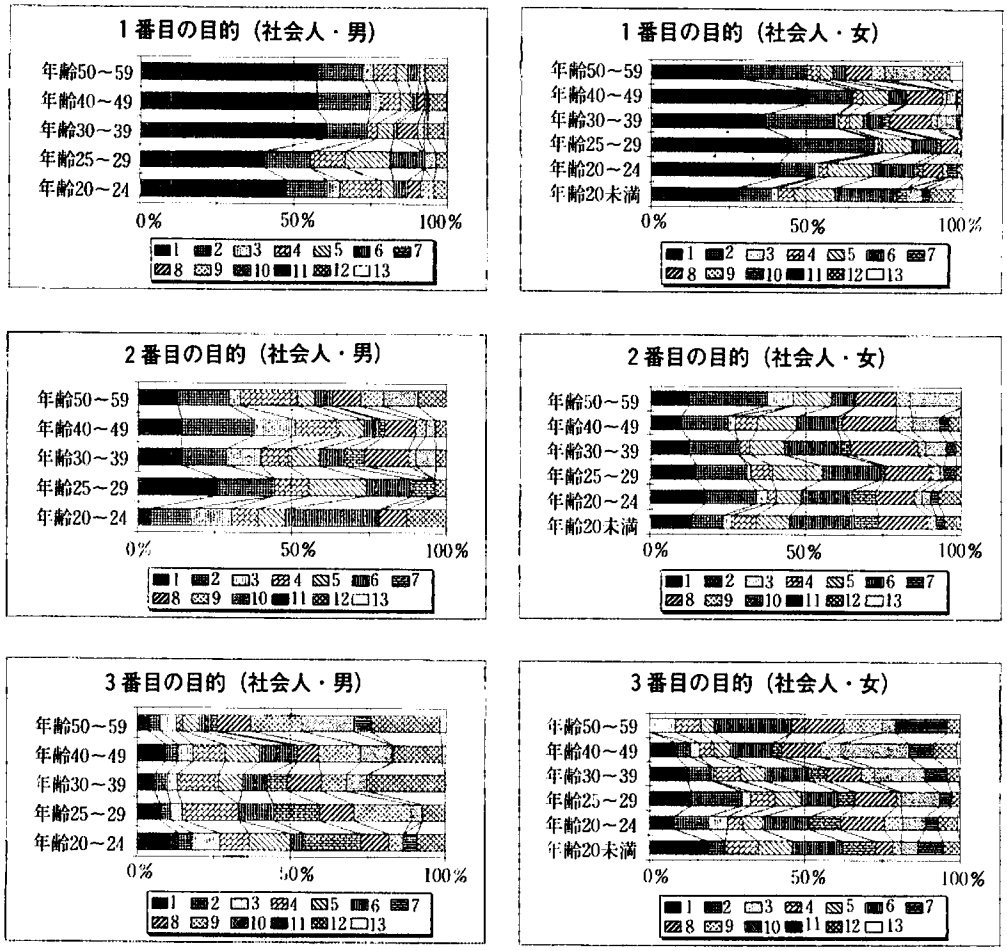


図２－１　「働く目的として考えられる」こと（社会人）

１：収入が良く，経済的安定を図る．２：自分の資格・技能が生かせる．３：勤務先が成長・安定し，知名度の高い企業である．４：社会に役立つ．５：感じが良く，仕事に興味が持てる．６：自分の視野を広げ，社会勉強になる．７：レジャー・趣味の資金を得る．８：勤務条件が良い．９：福利厚生施設など職場環境が充実している．10：通勤に便利である．11：家にこもっていたくない．12：働くのがあたりまえだから．13：その他

挙げられているのが特徴的である．また，女性では「通勤に便利である」が30～59歳および20歳で挙げられているのが，男性では25～39歳で僅かに見られるだけなのも，男女の考え方の相違を示している．

２・３番目の目的は回答選択肢が多くなり，特出した項目はない．２番目の目的では男女共に「経済的安定」，「自分の資格，技能が生かせる」，「社会勉強になる」，「仕事に興味が持てる」などが共通している．男性では女性に比べて「社会に役立つ」や「勤務先の知名度が高い」，「働くのがあたりまえ」などの割合が大きい．一方女性では男性に比べて「家にこもっていたくない」の割合が大きい．また，男性では「社会勉強になる」は年齢とともに減少するの

に対し，女性では各年代でほぼ一定している．「通勤に便利」は30歳以上で割合が大きくなるが，特に女性でそれが顕著である．

3番目の目的は，男性では「社会に役立つ」や「働くのがあたりまえ」「職場環境が充実している」の割合が増加し，また若い年代で「レジャー，趣味の資金を得る」の割合が大きいのが特徴的である．一方，女性では「通勤に便利」や「家にこもっていたくない」の割合がとくに25歳以上で大きくなる．また，「社会勉強になる」を挙げる割合が各年代で男性より多い．

3·1·2·2　学生の場合：1番目の目的は社会人同様，男女共に「経済的安定」が最も多

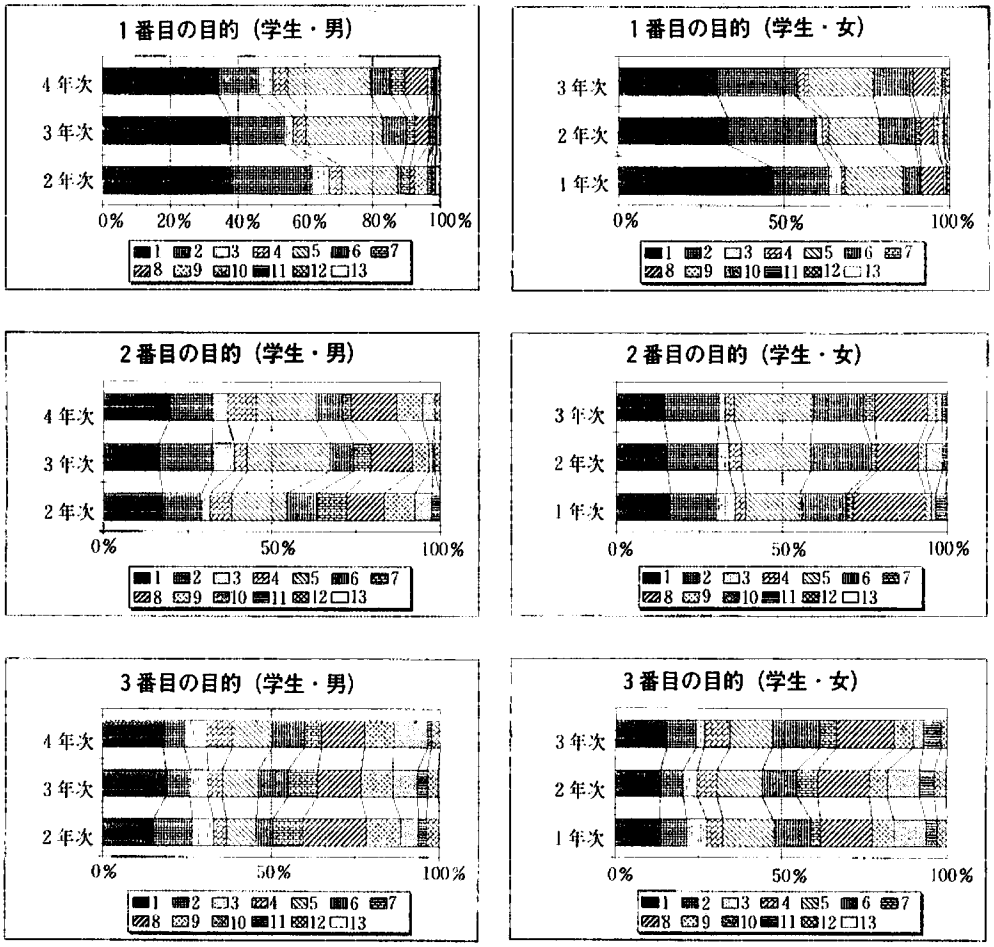


図2－2　「働く目的として考えられる」こと（学生）

1：収入が良く，経済的安定を図る．2：自分の資格・技能が生かせる．3：勤務先が成長・安定し，知名度の高い企業である．4：社会に役立つ．5：感じが良く，仕事に興味が持てる．6：自分の視野を広げ，社会勉強になる．7：レジャー・趣味の資金を得る．8：勤務条件が良い．9：福利厚生施設など職場環境が充実している．10：通勤に便利である．11：家にこもっていたくない．12：働くのがあたりまえだから．13：その他

い．次いで「自分の資格・技能が生かせる」，「仕事に興味が持てる」，「社会勉強になる」，「勤務条件がよい」が挙げられている．

同年代の社会人との相違は，男性では「経済的安定」，「社会に役立つ」，「働くのがあたりまえ」の割合が低く，逆に「仕事に興味が持てる」の割合が高いことが挙げられる．また，僅かではあるが「レジャー，趣味の資金を得る」が入っていることも特徴的である．女性では，「経済的安定」の割合が高学年になるほど減少し，「自分の資格・技能が生かせる」や「社会勉強になる」が増加する傾向が見られる．「家にこもっていたくない」が入っていないことも社会人との相違である．また男子学生に比べても「社会に役立つ」の割合が低い．

２番目，３番目の目的は社会人同様多岐に分かれるが，２番目の目的では「仕事に興味がもてる」，「勤務条件がよい」，「経済的安定」，「自分の資格・技能が生かせる」などの割合が比較的大きい．社会人の同年代と比較すると，男性では「社会勉強になる」や「働くのがあたりまえ」が少なく，逆に「職場環境が充実」，「通勤に便利」，「仕事に興味がもてる」の割合が大きい．女性では，男性同様「働くのがあたりまえ」が社会人より少なく，「仕事に興味がもてる」は社会人より多い．また「社会に役立つ」や「レジャー，趣味の資金を得る」も社会人に比べて少ない．

男性と女性の相違は，「社会に役立つ」や「レジャー，趣味の資金を得ること」「職場環境の充実」が女性では少なく，逆に「社会勉強になる」は男性より多いことなどである．

３番目の目的は男女共に「勤務条件がよい」の割合が社会人に比べて比較的大きい．逆に「社会に役立つ」や「レジャー，趣味の資金を得ること」，「働くのがあたりまえ」は社会人より少ない．また男性では「通勤に便利」や「自分の資格・特技が生かせる」の割合も社会人より大きい．男子学生と女子学生を比較する」，「レジャー・趣味の資金」は男子学生のほうが多く，「社会勉強」や「家にこもっていたくない」は女子学生のほうが多いが，あまり顕著な相違はない．

3·1·3　女性のライフスタイルについて

3·1·3·1：社会人の考える理想と現実：社会人男性の理想とする女性のライフスタイルは「職業を持ち，育児が終って職場に戻る」が最も多く，次いで「結婚を機会に家庭に入る」，「出産を機会に家庭に入る」の割合が大きい．この傾向はどの年齢層でもほぼ同様である．現実のライフスタイルもほぼ同様の傾向を示しているが，40歳以上では「結婚や出産の時期も仕事と両立させる」の現実が理想をかなり上回っていることが注目される．

社会人女性の理想とするライフスタイルは，20歳未満では「結婚を機会に家庭に入る．」が群を抜いているのに対し，20歳以上では「育児が終わって職場に戻る」が群を抜いている．また「結婚を機会に家庭に入る．」は年齢とともに減少し，逆に「結婚や出産の時期も仕事と両

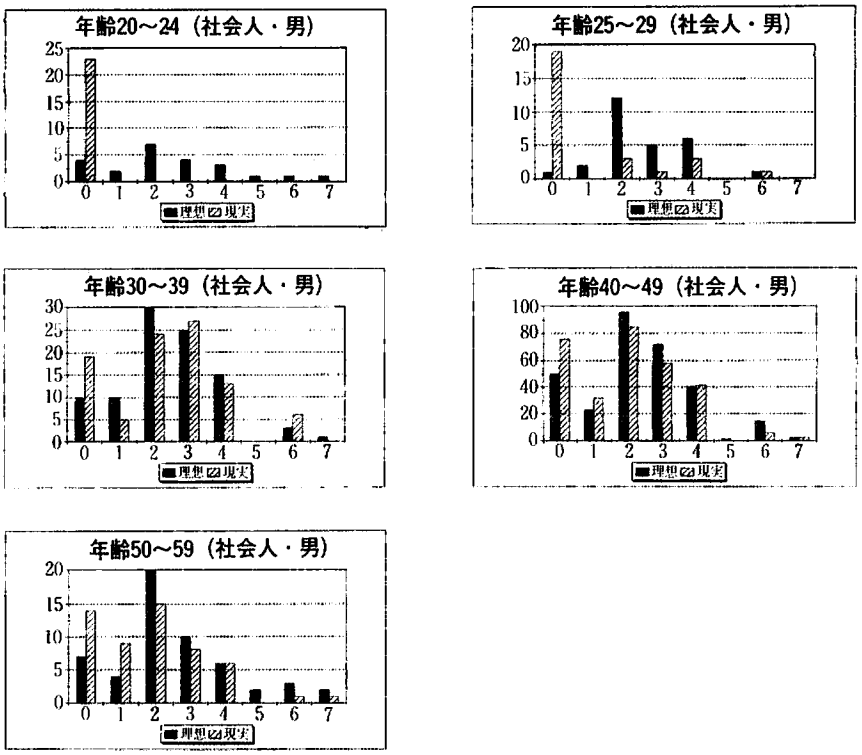


図3－1　女性のライフコースの理想と現実［社会人(男)］

(注) 0：無回答 1：職業を持ち，結婚や出産などの時期も関係なく仕事と両立させる．2：職業を持ち，結婚や出産の一時期，家庭に入り，育児が終わって再び職場に戻る．3：職業を持ち，結婚を機会に家庭に入る．4：職業を持ち，出産を機会に家庭に入る．5：職業を持ち，結婚をせずに仕事一筋にキャリアウーマンとなる．6：卒業後，就職せず結婚し，子供を産み専業主婦となる．7：その他

立させる」は増加する傾向が見られる．現実のライフスタイルは，40歳代ではほぼ理想と一致しているが，25，30，50歳代では「結婚や出産の時期も仕事と両立させる」が「育児が終わって職場に戻る」を上回っており，理想と現実に差が見られる．とくに30歳代でその差が大きい．

男性と女性の相違は，「出産を機会に家庭に入る」や，「専業主婦」は男性のほうが多く，「育児が終わって職場に戻る」や「結婚や出産の時期も仕事と両立させる」は女性のほうが多いことなどである．

3·1·3·2　学生の考える理想：男子学生では，「職業を持ち，育児が終わって職場に戻る」が最も多いが，「結婚を機会に家庭に入る」や「出産を機会に家庭に入る」も同程度存在している．一方女子学生では，「職業を持ち，育児が終わって職場に戻る」が群を抜いており，それも学年とともに増加する傾向が見られ，逆に「結婚を機会に家庭に入る」が減少している．割合は小さいが，「専業主婦」は男子学生で見られ，「キャリアウーマン」は女子学生で見られ

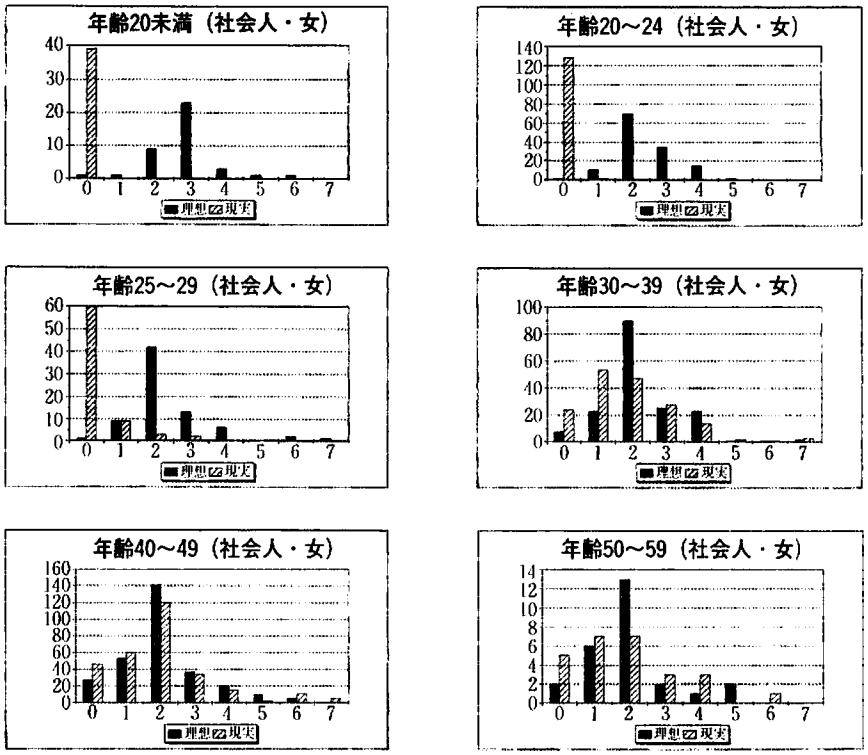


図３－２　女性のライフコースの理想と現実［社会人(女)］

(注) 0：無回答 1：職業を持ち，結婚や出産などの時期も関係なく仕事と両立させる．2：職業を持ち，結婚や出産の一時期，家庭に入り，育児が終わって再び職場に戻る．3：職業を持ち，結婚を機会に家庭に入る．4：職業を持ち，出産を機会に家庭に入る．5：職業を持ち，結婚をせずに仕事一筋にキャリアウーマンとなる．6：卒業後，就職せず結婚し，子供を産み専業主婦となる．7：その他

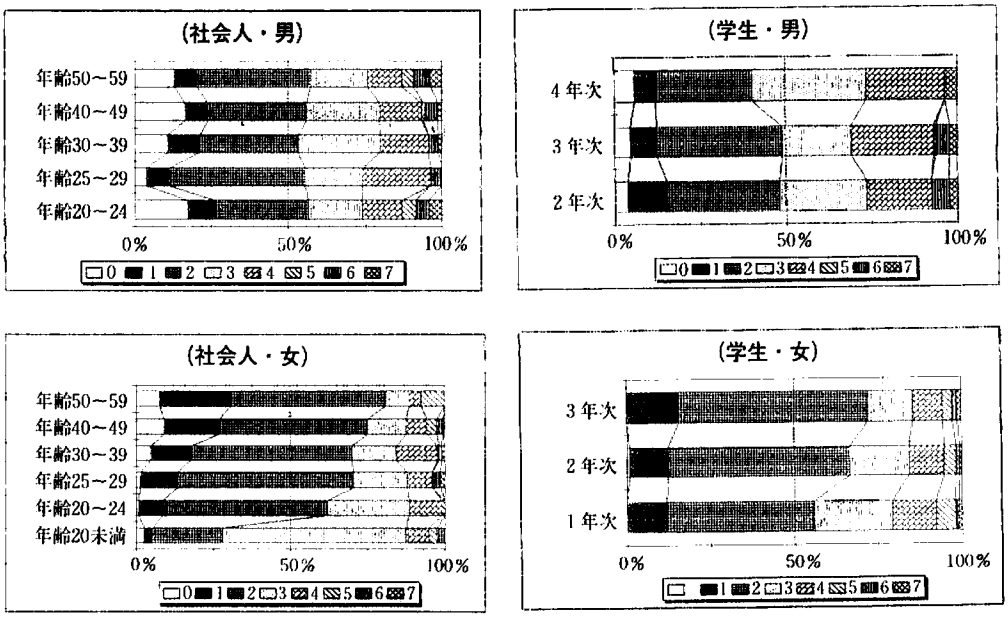


図３－３　女性のライフコースの理想―社会人と学生―

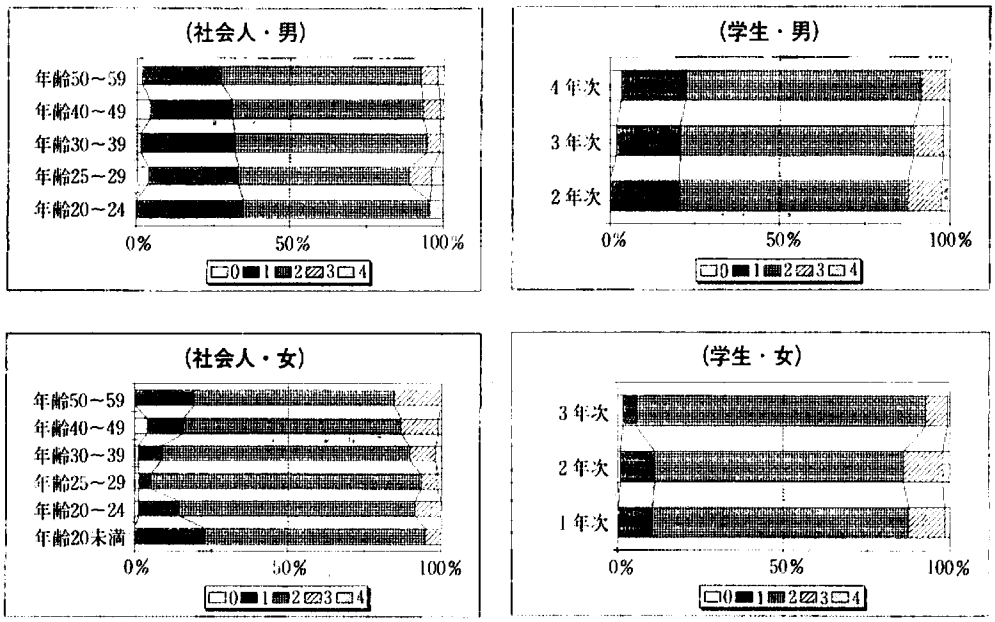


図4　男女の役割分担の意識―社会人と学生―

0：無回答　1：女性は家事に専念し，男性を手伝い，補助していくのが一番良い．2：男女は性差を認めた上で，それぞれの能力に適した仕事をして協力し合うのが良い．3：男女差はないから，女性は仕事を持ち，家事・育児を平等に分担するのが良い．4：男性は，能力ある女性を手伝い，補助していくのが一番良い．

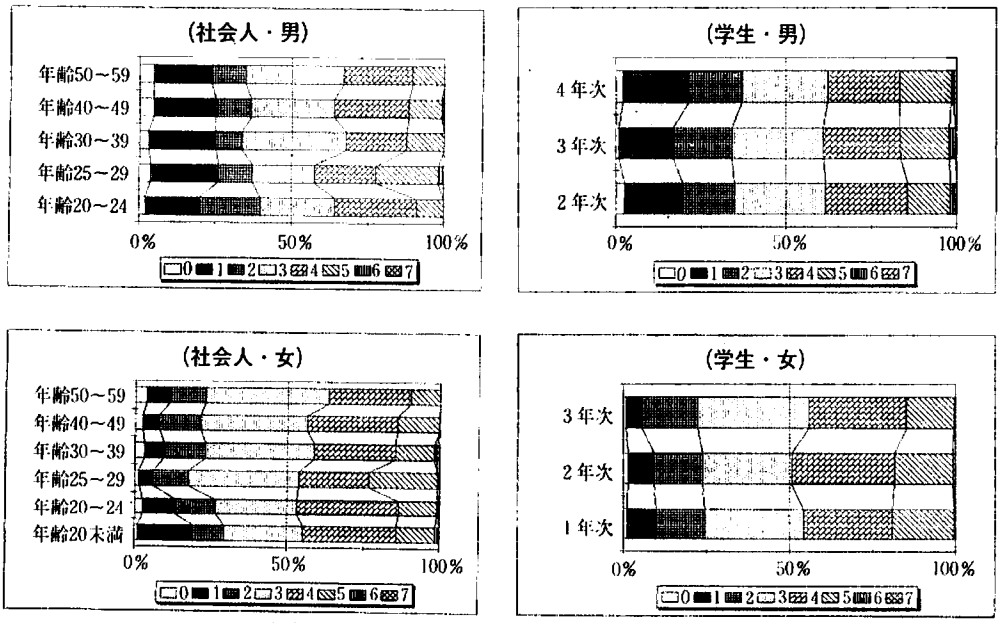


図5　家事労働に対する意識―社会人と学生―

(注) 0：無回答　1：家事労働は従来通り，女性（主婦）が専念すべきである．2：女性を家事労働に拘束せず，家族各自が自主的に行う．3：家事労働は，生活能力の基盤として男女共に，子供の時より身につけ学ばせる．4：家族のコミュニケーションをはかるために，家事は家族全員で分担し，協力する．5：趣味・特技を活かして，家族全員が家事の一部を分担する．6：世の中が便利になり，経済力があれば家事労働能力を身につける必要はない．7：その他

ることが対照的である.

同年代の社会人と比較すると，男子学生では差は余り無いが，女子学生では「結婚を機会に家庭に入る」が少なく，「キャリアウーマン」が社会人よりは多いことなどが指摘できる.

3·1·4. 男女の役割分担

3·1·4·1. 社会人の場合：男女共に，「性差を認めて協力しあう」が群を抜いているが，その割合は女性の方が大きい．男性では，次いで「女性が男性を補助」が多いが，女性ではそれは，20歳未満と50歳以上である程度見られるが，男性より少なく，とくに25歳～39歳で最も少ない．「家事，育児を平等に分担する」は，男性でも25歳以上ではいくらか存在するが，女性のほうが多く，それも年齢とともに増加する傾向が見られる.

「男性が女性を補助」は，僅かではあるが女性よりも男性で見られ，それも20歳代の男性で多いことが注目される.

3·4·4·2. 学生の場合：男女共に，上にのべた社会人の傾向とほぼ一致しているが，社会人と比べて「女性が男性を補助」が減少し，「性差を認めて強力しあう」は増加している.

3·1·5. 家事労働

3·1·5·1. 社会人の場合：男性の場合，「子供のときより学ばせる」と「家族全員で分担」がほぼ同じ割合で多く，次いで「女性が専念」，「趣味・特技を生かして」，「各自が自主的に」の順となっている．女性の場合，男性に比べて「子供のときより学ばせる」と「家族全員で分担」が多く，「女性が専念」は少ない．とくに25歳以上で少ないが，20歳未満では男性と同程度の割合で存在することが注目される.

3·1·5·2. 学生の場合：学生の場合も社会人とほぼ同様であるが，「経済力があれば身につける必要はない」が僅かではあるが社会人よりは多く見られる.

3·2. ライフスタイルに関する意識調査の回答カテゴリーのクラスター解析（社会人の場合）

学生と社会人を併せてクラスター解析をした結果，学生と社会人で回答パターンが大きく異なることが分かったので，職業に無解答のデータを除く，社会人だけのデータ（1245名）を用いて回答カテゴリーのクラスター解析を行った．結果はおよそ次の通りである.

1）回答パターンは年齢，職業，性別に関連して以下に述べる3つの群（A，B，D）に分けられる．また働く目的については他の回答カテゴリーとの関連があまり無いため，一つの群（C）となる.

2）回答パターンAは年齢30代の，無職（主婦）やサービス業で，配偶者と離別した者や女性に比較的多いパターンと考えられる．生きていくうえで大切なこととして健康を第一にあげ，第二に家庭生活，第三に収入や友人関係を考えている．

働く目的としては第一に勤務条件や通勤に便利を挙げ，ついで家にもっていたくないをあげるものが他より多いのが特徴的である．

女性のライフスタイルとしては職業と家庭生活の両方を重視し，現実に職業と家庭生活を両立させている者が多い．

男女の役割分担については，男女差はないまたはそれぞれの能力に応じて協力しあうべきと考え，家事労働については男女共に子供のときから学び，家族全員で協力するのがよいと考えている．

3）回答パターンBは年齢10代～20代の，金融・保険業に勤める独身者に多いパターンである．生きていく上で大切なこととして結婚や友人関係を挙げる者が多く，働く目的として自分の視野を広げ，社会勉強になると答えている者が多いのが特徴的である．

女性のライフスタイルとしては職業を持つが，結婚を機会に家庭に入るとする者が多い．

4）回答パターンDは年齢30代～50代の男性の既婚者に多いパターンである．配偶者と離別した者ともいくらか関連している．

生きていく上で大切なこととして第一に健康，第二に職業や収入，第三に家庭生活を挙げる者が多い．働く目的としては経済的な安定を第一に挙げ，ついで通勤に便利を挙げるものが比較的多い．

女性のライフスタイルとしては無回答が多く関心があまり無いことを示していると思われるが，専業主婦やキャリアウーマンという相反する傾向も含まれている．これは配偶者と離別した女性との関連が考えられる．

男女の役割分担や家事労働についても無回答が多く，関心は薄くまた，女性は家事に専念し，専業主婦になるのがよいとするものが比較的多い．しかし現実には職業を持ち，結婚や出産を機会に家庭に入った者や，育児が終わって職場に戻った者が多い．

3·3. ライフスタイルに関する意識調査の双対尺度法による解析結果（社会人の場合）

社会人のアンケートデータに関する性別・年齢別・回答カテゴリの3次元クロス集計表を，双対尺度法により解析した．なお，配偶者の有無，住所，職業の回答項目および度数の合計が20未満の回答カテゴリーは除いた．

1）クロス集計表の特異値分解

クロス集計表を特異値分解して得られた固有値は大きい順に，0.0641（寄与率38.9%），0.0505（30.6%），0.0126（6.8%），0.0083（5.0%）であった（図6—1）．第1，2成分が

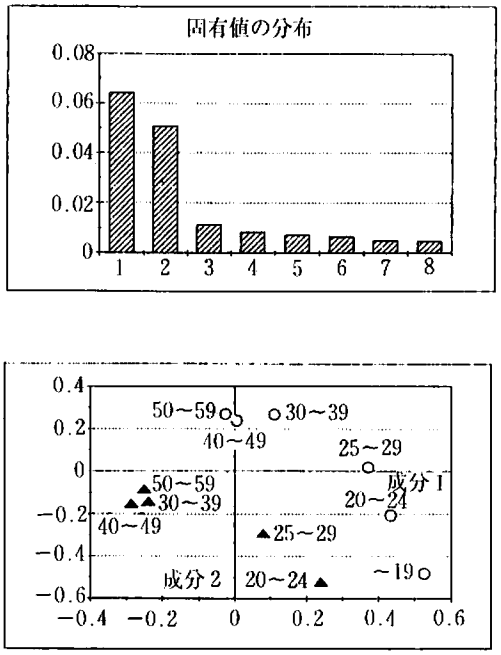


図6－1　3次元分割表の特異値分解の結果

上：固有値の分布
下：性別各年齢層の空間配置
（▲：男，○：女）

他より掛け離れて大きく，第2成分までで累積寄与率は69.5％となる．

これらの固有値を用いてカイ二乗検定を行うと，第1，2，3成分は0.1％の水準で有意，第4成分は2.5％で有意となった．

2）性別年齢層の得点と空間配置

各性別年齢層の第1～2成分の得点を用いてこれらを座標空間内に配置すると図6－1のようになる．これらから，第1成分は女性の30歳未満で大きく正の値となり，逆に30歳以上の男性で負となっていること，第2成分は女性の30歳以上で大きく正の値となり，男性の30歳未満で負となっていることが分かる．また同じ年齢層で比較すると，女性は第1，2成分ともに男性より正の側に偏っていることが分かる．また同性で比較すると30歳未満は以上に比べて第1成分は正の側に，第2成分は負の側に偏っている．

3）各回答カテゴリーの得点と空間配置

質問項目に対する各回答カテゴリーの第1，2成分の得点を用いて，これらを座標空間内に配置すると図6－2～図6－5が得られた．これらの結果から次のようなことが明らかとなる．

Ⅰ．第1成分への負荷が正方向に偏っている回答カテゴリー（以下括弧内の数字は選択の順番を示す）

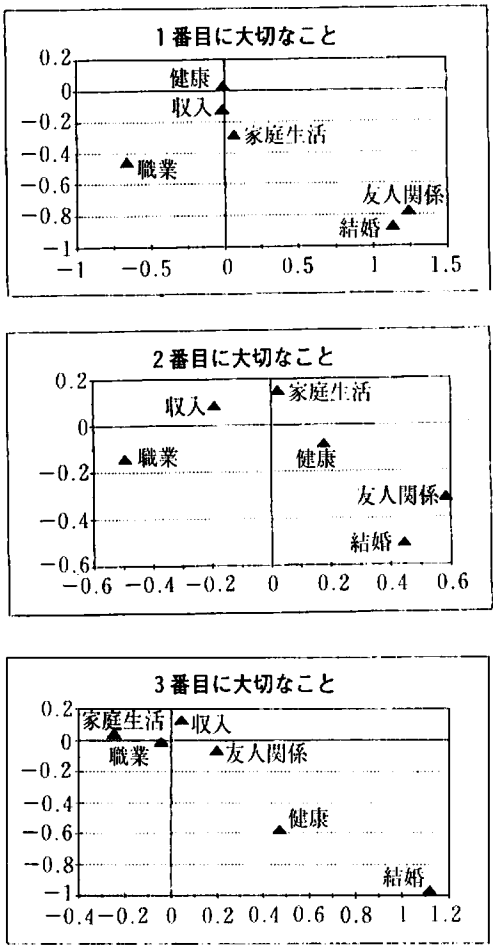


図6－2 「生きていく上で大切と思われること」の空間配置

(a)生きていく上で大切なこと：結婚（1，2，3），友人関係（1，2），健康（3），

(b)働く目的：レジャー・趣味の資金（1，2，3），社会勉強になる（1，2），仕事に興味がもてる（1），家にこもっていたくない（2，3），自分の資格・技能を生かせる（3）

Ⅱ．第1成分への負荷が負の方向に偏っているカテゴリー

(a)生きていく上で大切なこと：職業（1，2）

(b)働く目的：働くのがあたりまえ（1，3），勤務先が成長・安定し，知名度が高い（2），社会に役立つ（2），福利厚生施設など職場環境が充実（3）

(c)女性のライフスタイル：無回答，卒業後，就職せず結婚し専業主婦となる

(d)男女の役割分担：無回答，女性は家事に専念し，男性を手伝い，補助していく

(e)現実のライフスタイル：職業をもち，出産を機会に家庭に入る，職業をもち，結婚を機会に家庭に入る，卒業後，就職もせず結婚し，専業主婦となる．

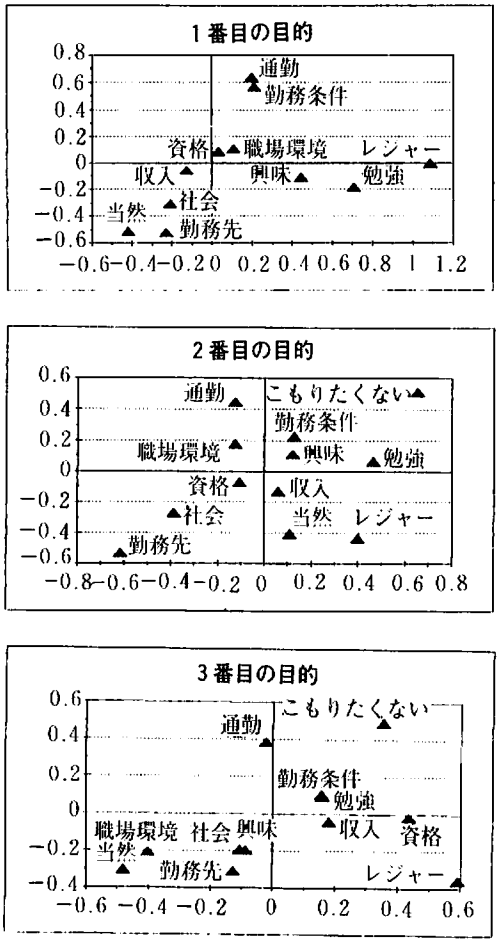


図6－3 「職場で働く場合の目的」の空間配置

(f)家事労働：従来通り，女性が専念すべき，無回答

Ⅲ．第2成分への負荷が正方向に偏っている回答カテゴリー

(a)生きていく上で大切なこと：健康（1），家庭生活（2，3），収入（2，3）

(b)働く目的：通勤に便利（1，2，3），勤務条件がよい（2）

(c)女性のライフスタイル：職業をもち，結婚や出産の時期も関係なく仕事と両立させる，職業をもち，結婚せず仕事一筋にキャリアウーマンとなる．

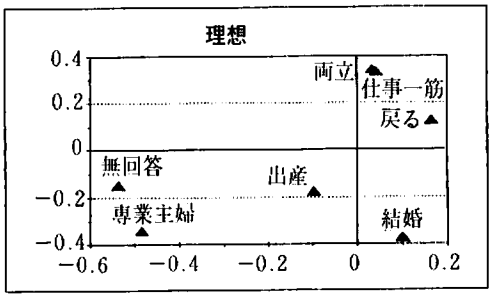
(d)男女の役割分担：男女差は無いから，女性は仕事を持ち，家事・育児を平等に分担

(e)現実のライフスタイル：職業をもち，結婚や出産の時期も関係なく仕事と両立させる，職業をもち，結婚や出産の一時期家庭に入り，育児が終って職場に戻る

(f)家事労働：生活能力の基盤として，男女共に子供のときより身につけ学ばせる

Ⅳ．第2成分への負荷が負の方向に偏っているカテゴリー

(a)生きていく上で大切なこと：結婚（1，2，3），友人関係（1，2），健康（3）



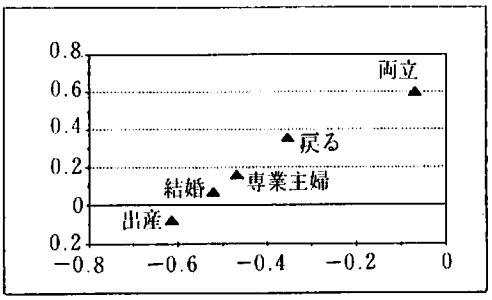
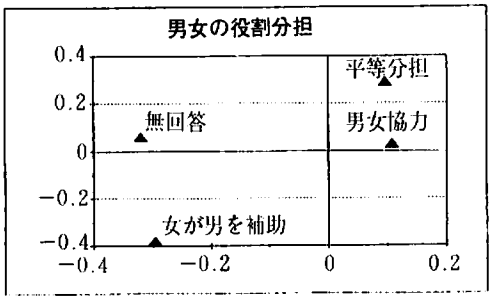


図6－4 「女性のライフコース」の空間配置
(上：理想，下：現実)



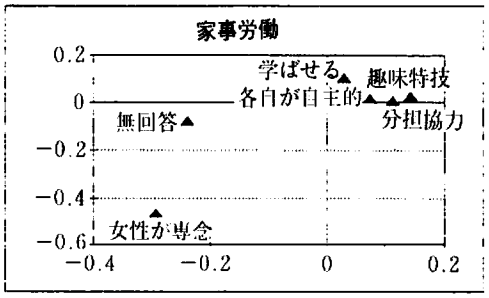


図6－5 「男女の役割分担および家事労働についての意識」の空間配置

(b)働く目的：勤務先が成長・安定し，知名度が高い（1，2，3），働くのがあたりまえ（1，2，3），社会に役に立つ（1，2），レジャー・趣味の資金を得る（2，3）

(c)女性のライフスタイル：職業を持ち，結婚を機会に家庭に入る，卒業後，就職せず結婚し専業主婦となる

(d)男女の役割分担：女性は家事に専念し，男性を手伝い補助して行く

(e)現実のライフスタイル：職業を持ち出産を機会に家庭に入る

(f)家事労働：従来通り女性が専念すべきである

以上の事から，第1成分の正と負で対照的な要因として，自己実現（正方向）と義務の遂行（負方向）を考える事ができる．すなわち第1成分の得点が正方向に偏るほど自己実現志向であり，負方向に偏るほど義務遂行志向と考えられる．

同様に，第2成分の正と負で対照的な要因としては，個人生活の重視（正方向）と社会慣習の重視が考えられる．すなわち第2成分の得点が正方向に偏るほど個人の生活を重視し，負方向に偏るほど社会的慣習を重視する傾向が強いと考えられる．

したがって先に述べた質問項目に対する回答の男女および年齢による相違はこれら2つの要因によってほぼ70％決定づけられるということができる．

例えば結婚や友人関係を大切とする事は，自己実現を志向しかつ社会慣習を重視する結果であり，職業を大切とする事は，義務遂行を志向し，かつ社会慣習を重視する結果であり，健康や収入を大切とする事は個人生活を重視する結果と解釈される．

これらのことと図6－1の性別，年齢層の配置から，女性の場合，30歳未満では自己実現志向が強く，30歳以上では個人生活を重視するようになり，また25歳未満ではさらに社会慣習を重視する傾向も強いといえる．男性の場合，25歳未満では社会慣習を重視する傾向が強くかつ自己実現志向であるが30歳以上では義務遂行志向となる．

また一般に，女性は男性より自己実現志向かつ個人生活を重視する傾向が強く，男性は女性より社会慣習を重視し，義務遂行型といえる．年齢別に見ると，一般に30歳未満では自己実現志向でかつ社会慣習を重視するが，30歳以上では義務遂行志向でかつ個人の生活を重視するようになるといえる．

ただしこれらの結果は，職種の相違を無視した結果であるので，年齢による職種の偏りが反映している可能性も否定できない．

以上，今回のアンケート調査の結果をまとめることができる．なお，今までに報告されている同類の調査結果との比較およびそのバックグランドとなる社会環境との関係は，さらに今後の研究課題として取り上げて行く予定である．

最後に本調査にご協力下さった多くの市民ならびに学生の方々に厚くお礼申し上げます．

文　献

1）生命保険文化センター：女性の生活意識に関する調査，生命保険文化センター，東京，1992，pp36～123
2）婦人教育研究会：統計にみる女性の現状（1991年度版），垣内出版，東京，1991，pp76～81
3）日本婦人団体連合会：婦人白書1993，ほるぷ出版，東京1993，pp117～122，215～226
4）品川汐夫：下関女子短期大学紀要，10-11，1992，1～8
5）西里静彦：質的データの数量化，朝倉書店，東京，1991，pp.28～58